

令和7(2025)年度

札幌市立高校生・ポートランド市グラント高校生交流事業

帰国報告書

Portland, Oregon
USA

Sapporo, Hokkaido
JPN

March 12th - 21st, 2026



目次

巻頭言

【国際教育推進委員会 担当校長 市立札幌清田高等学校 前校長】

市立札幌平岸高等学校 三関 直樹

札幌市立高校生・ポートランド派遣団 引率報告

【札幌市立高校生・ポートランド市高校生交流事業 引率(団長)】

市立札幌清田高等学校 後藤 加奈

生徒報告

1. 全行程別報告

- 1日目 … 川辺 倫瑠(旭丘)・森 香乃羽(啓北)
- 2日目 … 宮崎 咲良(新川)・米谷 心一朗(藻岩)
- 3日目、4日目 … 佐藤 結(藻岩)・山本 祐綺(開成)
- 5日目 … 下山 琉奈(新川)・立松 美来(平岸)
- 6日目 … 大竹 美羽(旭丘)・長谷川 司(清田)
- 7日目 … 稲村 怜那(清田)・上城 穂乃和(大通)
- 8日目 … 飯塚 南帆(開成)・日水 陵(啓北)
- 9日目、10日目 … 上垣 舞衣(大通)・陸井 翔太(平岸)

2. 「札幌×ポートランド探究」

○テーマ:「高校生×流行」

「ポートランドと札幌の高校生の流行の共通点と相違点」

【川辺 倫瑠(旭丘)・森 香乃羽(啓北)】

○テーマ:「スケーター×ファッション」

「札幌とポートランドにおけるスケーターファッションの違い」

【飯塚 南帆(開成)・日水 陵(啓北)】

○テーマ:「名物×地元のスーパー」

「札幌とポートランドのスーパーマーケット比較から分かる文化の違い」

【下山 琉奈(新川)・立松 美来(平岸)】

○テーマ:「語学学習」

「互いの文化と繋がる言語学習法」

【稲村 怜那(清田)・上城 穂乃和(大通)】

○テーマ:「公共交通機関」

「高校生の視点で見た札幌とポートランドの交通事情」

【大竹 美羽(旭丘)・長谷川 司(清田)】

○テーマ:「公園」

「さっぽろ&ポートランドの公園比較 ～身近な自然との関わり」

【宮崎 咲良(新川)・米谷 心一朗(藻岩)】

○テーマ:「スポーツを行う環境」

「スポーツの楽しみ方と環境 ～札幌とポートランドの比較から見えるもの～」

【佐藤 結(藻岩)・山本 祐綺(開成)】

○テーマ:「スポーツを通じた交流」

「ポートランドと札幌のスポーツの交流の違い」

【上垣 舞衣(大通)・陸井 翔太(平岸)】

巻頭言

国際教育推進委員会担当校長 市立札幌清田高等学校前校長 三関 直樹

このプログラムは、札幌市とアメリカ合衆国オレゴン州ポートランド市の姉妹都市交流事業の一つであり、ポートランド市のパブリック・スクールであるグラント高校と札幌市立高校の高校生による相互交流プログラムです。札幌市立高等学校・特別支援学校長会とポートランド・イマージョン教育「親の会」、ポートランドー札幌姉妹都市協会、札幌国際プラザの4者での協力のもと実施しているプログラムになっています。この事業の目的は「国際的な視野と共生意識を備えた若者の育成」と「姉妹都市交流の促進」にあり、2011年度からこれまでに両市併せて200名を超える高校生が相互に訪問し、様々な出会いと多くの学びを得ています。

札幌市立高等学校・中等教育学校の8校16名の代表派遣生徒は、派遣前にはこの事業の目的と自身に課されたテーマへの探究に日々努めてきており、さらには、札幌市立高等学校・中等教育学校の代表としての自覚をもって、事前研修で取り組んでまいりました。2026年3月12日より3月21日までの行程にて、札幌市の代表として、ポートランド市長への表敬訪問、グラント高校での生徒・学習交流、小学校・中学校での学習交流、ボランティア体験などに取り組んでまいりました。派遣生徒一人一人が掲げていた探究テーマのフィールドワークを通して文化の違いを実感するとともに、自分自身の肌で感じた思いや経験について、この報告書ではその成果がまとめられたものとなっています。

また、今回の派遣団の代表生徒の経験・体験が、札幌市とポートランド市の交流の架け橋となりながら、あたたかな気持ちを両市にもたらすこと、この派遣プログラムにかかわってきた一員として、次期代表生徒にその誇りが受け継がれることが期待できる、楽しい報告書になっております。派遣生徒のリアルな経験をこの報告書から感じていただければ幸いです。

この派遣事業実施にあたり、昨年度は札幌国際プラザで寄付金を募っていただきました。併せて、今期は新たな試みとして本派遣事業に係るクラウドファンディングを始めました。派遣生徒の取組から得られた成果を市民の皆様へ還元することにご理解をいただき、支援をいただいたことに派遣生徒ともども感謝を申し上げます。札幌のみならずポートランドの団体、企業、個人の皆様からご支援をいただき、派遣生徒の援助を行うことができました。この書面をお借りしお礼申し上げます。

このたびの派遣事業にあたり、札幌市国際部、札幌国際プラザ、札幌市教育委員会をはじめ、関係各所の皆様に感謝申し上げますとともに、次年度以降もこの事業が発展的に継続することを祈念し、巻頭言とさせていただきます。

令和7年(2025)年度 札幌市立高校生・ポートランド派遣団引率報告

派遣団団長 市立札幌清田高等学校 教諭 後藤 加奈

はじめに

本事業は、札幌市と姉妹都市であるポートランド市との深い絆を背景に、次代を担う高校生たちが異文化に触れ、自己のあり方を見つめ直す貴重な機会として長年続けられてきました。今年度、8校16名の生徒とともに歩んだ半年間の軌跡をここに報告いたします。

事前研修

10月から2月にかけて、国際プラザにて計5回の研修を行い、8校から集まった16名は、回を重ねるうちに学校の枠を超えたつながりを築いていきました。全ての回において研修内容は盛りだくさんであったため、生徒たちは放課後や休日を利用し、研修に向けた準備を行いました。各校のALTを含む先生方には細かな点までご指導いただき、この場を借りて深く感謝申し上げます。

事前研修で探究活動を行うにあたり、本事業のねらいをふまえて、現地での交流および帰国後の報告会を主軸に置くことにしました。現地では札幌の良さをポートランドの方々に伝え、帰国後は札幌の方々にポートランドの良さを伝えることを活動の柱としました。研修そのものには様々な制約があり、姉妹都市とその交流に関する十分なインプットがない中、生徒たちは探究テーマを設定し、問いを立てなければならず、大きな壁にぶつかりました。今年度は引率教員が可能な限り直接指導を行い、カバーできない部分については、探究活動に知見のある周囲の方々の協力を得ながら、アドバイスをを行うことでフォローしました。今年度の経験をふまえると、事前研修ではインプットに重きを置き、出発前までは「今できる範囲」の探究に留めることで、現地での発見をより柔軟に受け止める余裕が生まれるのではないかと考えます。「問い」を立てるものの難しさを追求したからこそ見えてきた、次年度以降のプログラムをより良くするための貴重な教訓となりました。

【事前研修スケジュールと内容】

第1回 10月5日(日)午前	・探究とは？ ・ペア決め ・探究テーマ検討
第2回 11月2日(日)午後	・探究テーマ決定 ・ペアによるプレゼン準備
第3回 12月14日(日)午後	・外部講師 石神友希穂(K&Y Education、米国スタンフォード大学院卒)によるレクチャー ・英語プレゼン作成および練習
第4回 1月25日(日)午前	・英語プレゼン練習
第5回 2月27日(金)午後	・訪問先での挨拶練習 ・日本語プレゼン練習 ・市長表敬

現地研修

3月12日に札幌を出発し、8日間の日程で活動しました。生徒たちはホストファミリー宅で生活しながら、在ポートランド領事事務所への表敬訪問、日本語イマージョン・プログラムを行う小中高での交流、そしてボランティア体験などを経験しました。現地での生徒たちの様子は、事前研修での姿からは想像がつかないほど明るく生き生きとしており、自ら進んで交流する姿が印象的でした。

生徒たちが準備してきた内容を披露する場となったのは、現地の中学校および高校での日本語イマージョン授業です。授業見学をさせていただく中で強く感じたことは、事前研修で準備した「きれいに整った発表」を披露すること以上に、その場で生まれる「双方向のやり取り」にこそ、探究的な学びの本質があるということです。これは、第3回事前研修で講師の石神友希穂氏から学んだ「完璧なスライドや原稿を作り込むことにとらわれず、自分自身の気づきを自分の言葉で語る」ことの実践の場にもなりました。目の前の相手と向き合い、対話の中から何を持ち帰るか。生徒たちが現地での予期せぬ反応や問いかけを通じて、自らの内面に気づきや変化を抱いたことが、後述の帰国報告会において伝わってきました。各日程の詳しい内容は、生徒による全行程別報告をお読みください。

事後研修および帰国報告会

帰国後の事後研修で、生徒たちが「また必ず行きたい」「ホストファミリーに会いたい」と話しているのを耳にし、しっかりと交流できたことにひとまず安堵しました。多忙な時期のため、今後はオンラインの活用など負担の少ない実施形態への検討が必要です。

報告会では、それぞれの探究テーマの発表後、自分の学びや思いを原稿なしで自分の言葉で語る時間を設けました。自らの変化を自分の言葉でしっかり伝える姿には、聴衆の心に届く力強さがあり、引率者として心から打たれるものがありました。

今後に向けて

本事業の持続可能性について、率直に感じたことを記します。現状、引率教員が日常の校務を行いながら、研修の設計から指導までのすべてを担うことは、体制としてかなり難しくなっていると感じます。民間プログラムのような専門的な視点を取り入れたり、学校での学びとよりスムーズに連動させたりすることで、生徒たちの学びはさらに深まるはずです。関係する皆さまとともに、「何のための研修か」「生徒に何を持ち帰ってほしいのか」という原点を改めて共有し、プログラム全体をより良い形に整えていく時期が来ているのではないのでしょうか。今回の経験を経た生徒たちが、両市の絆をつなぐ存在になってくれることを願いつつ、今後の方向性について皆さままでご相談していただければと思います。どうぞよろしく願いいたします。

生徒報告

1. 全行程別報告

【1日目】

川辺 倫瑠(旭丘)・森 香乃羽(啓北)

研修の一日目である3月12日は一日のほとんどが移動でした。新千歳空港・成田国際空港・バンクーバー空港・ポートランド空港を経由し、約14時間かけてオレゴン州ポートランドに到着しました。バンクーバー空港へ向かう10時間のフライトでは、機内食を楽しむことなどができましたが、学生のほとんどが初めての長時間フライトだったので疲れていました。それでもこれからアメリカで体験するであろう様々な物事に期待で胸を膨らませていました。

今回派遣事業に参加した生徒の中には、夏に Grant から留学生を受け入れていた生徒がいたので 久しぶりの再会に喜んでいました。空港からホストファミリーの家へ向かう途中で、ハンバーガーを食べに行った家庭もあれば、それぞれの家庭料理を楽しみながら、ホストファミリーと雑談をしたり、ホストシスターと普段の学校生活について話したり、多くの写真を撮ったりした家庭もありました。

私はホストファミリーの家に着いた後、バジルで味付けされた焼き鮭と白米の美味しい夕食をいただきました。最初は会話がほとんど聞き取れず不安な気持ちになりましたが、ホストファミリーが優しい英語で話題を振ってくれたおかげで、夕食の時間を楽しむことができました。どのホストファミリーも快く受け入れてくださったそうで、大きな心配もなく一日目を終えることができました。

【2日目】

宮崎 咲良(新川)・米谷 心一朗(藻岩)

2日目は、ポートランド領事事務所、市役所の訪問、ポートランドのシティウォーク、ポートランド州立大学の訪問と、到着した次の日とは思えないほど内容の濃いスケジュールを過ごしました。この日は、ポートランドについて学びながら実際に街を歩き、多くの方々と交流する一日となりました。

まずは在ポートランド領事事務所を訪問し、総領事からポートランドの特徴やご自身の経験についてお話を伺いました。そして「先入観を与えすぎないことも大切」と話されており、自分の目で見て感じて発見することの重要性を学びました。

その後、市役所を訪問し、国際関係部長のチドーさんからポートランドの街づくりや札幌との歴史的な関係についてお話をいただきました。普段関わることのできない立場の方々と直接交流できたことはとても貴重で、視野が広がる経験となりました。

午後はシティウォークを行い、ポートランドのダウンタウンの主要な観光地を実際に歩きながら学びました。ポートランド-札幌姉妹都市協会の菊地会長から、街並みや建物に関する詳しい説明や豆知識を教えてください、より理解を深めることができました。街の至るところにミューラルアートがあり、アートが身近にある都市であることを実感しました。途中で立ち寄った美術館では、スタッフの方が「2階は無料で見ていいですよ」と声をかけてくださり、予定にはなかった美術鑑賞をすることができました。短い時間ではありましたが、作品を観察しながらアートに触れる貴重な時間となりました。

その後、ポートランド州立大学を訪問しました。現地の大学生と一緒にランチをとりながら、お互いに質問をし合い交流を深めました。その後はキャンパス内を案内していただき、特にジムでは施設の説明を受け、実際にバスケットボールを体験するなど、リアルな大学生活を知ることができました。

すべてのスケジュールを終えた後は、ホストファミリーと一緒に昔の写真を見せ合い、お互いの思い出について話しました。言葉の壁を感じる場面もありましたが、それ以上に心が通じ合う温かい時間となり、とても良い思い出になりました。

【3日目、4日目】

佐藤 結(藻岩)・山本 祐綺(開成)

3日目と4日目は休日だったため、各自それぞれのホストファミリーと過ごしました。

私(山本)は Arch Cape というビーチに行きコテージに泊まりました。大きな岩や遠くまで続く砂浜、海岸に隣接する森など、見たことがない景色が広がるとてもきれいなビーチでした。特に、石狩にあるビーチよりも砂浜の色が白く、海の青がくっきりと見えました。夏の海では泳ぐというイメージが強かったので、ホストファミリーが「オレゴンの海水は冷たいから夏でもあまり泳ぐことはない」と言っていたのがとても印象に残りました。

4日目は、Cannon Beach という Arch Cape の近くにある有名なビーチでショッピングをしました。お菓子や雑貨の値段はポートランドにあるスーパーマーケットよりも高く感じられましたが、観光客に人気のビーチなのでアメリカを感じられるお土産を買うことができました。2日間通してホストファミリーとたくさん話すことができました。

私(佐藤)は3日目は朝からダウントウンで行われているサタデーマーケットという、ハンドメイドのお店や食べ物のお店がたくさん集まる場所に連れて行ってもらい、アクセサリなどを購入しました。その後はホストスチューデントと一緒にバスに乗り、マクドナルドに行きました。バスに乗る時に「ワンデーパスを買いたいです」と英語で運転手さんに言う時にとっても緊張しましたが、上手く聞き取ってもらえて「Of course」と笑顔で運転手さんに言って貰えた時はとても嬉しかったです。マクドナルドではセットを頼みましたが、バーガーのサイズは日本と恐らく変わらなかったけれどドリンクのサイズが日本に比べると大きかったのに驚きました。

4日目はホストファミリーと一緒にマルトノマ滝に車で行きました。人生で初めて見る滝でとても迫力がありました。

【5日目】

下山 琉奈(新川)・立松 美来(平岸)

5日目はバディと一緒にグラント高校で授業を受けました。学校は制服がなく、メイクをしたり、アクセサリを付けたり、髪を染めている人が多くとても自由な校風でした。アメリカでは16歳から車の免許が取れるので車を運転して登下校している生徒も多く、車を敷地内の駐車場や、学校の近くの路上に止めているようでした。また、授業ごとに教室が全て違い、先生1人につき1つの教室があるようで、校内が非常に広く迷子になったりお手洗いに行っていたら間に合わないことも多いだろうなと思いました。授業時間は90分と日本の多くの高校より長く、午前2限分、午後2限分の時程になっていました。

私のバディは最高学年である4年生でした。1限目は経済の授業で、「予算配分ルール」についてで、日本では考えられないほど先生への質問が飛び交っていました。わからないと思ったらすぐに聞くことが当た

り前の空気で、日本よりも質問のしやすい雰囲気が漂っていました。2限目は日本語の授業で、日本語しか使用できないルールになっていました。授業では葛飾北斎についての映画を見る前にあらすじを読んで、一人ひとり先生に話す時間がありました。私たちはこの日本語クラスの生徒に向けて英語で準備したスライドの発表を行いました。スライド発表では何度か引っかかってしまいましたが、真面目に聞いてくれて、クイズタイムでは楽しそうに考えたり発言してくれたのでとても嬉しかったです。多言語の難しさを身を以て体験しているからなのかなと思いました。

昼食の時間では、決まった教室がないため、カフェテリアがいくつかあり、そこで食べたりしていました。人によっては、廊下や外のベンチ、学校の外にある近場のカフェまで行く人もいます。そこで気がついたのは、生徒の中でグループがあって集まっているのですが、大体のグループは人種が同じ生徒たちで構成されているという点です。アジア人も黒人も白人もいるようなグループはあまり見受けられませんでした。アメリカではバックグラウンドが無意識レベルで重要視されているのかもしれないと思いました。廊下には「STOP! ASIAN HATE!!」と書いてあるポスターもあったので、そこで初めて、アメリカでは人種差別が身近にあるものなんだな、と実感しました。

1日を通して、グラント高校ではいい面も悪い面も見ることができました。自由な校風や、質問しやすい雰囲気などは日本に足りない面だと思います。しかし、アメリカならではの課題もあることを自分自身の目で見て実際に感じることができました。今後、日本にも移民が増え多文化共生社会になっていくと考えられます。その時、どうすべきなのか、未来のことを考えるきっかけになりました。

【6日目】

大竹 美羽(旭丘)・長谷川 司(清田)

6日目は、前日に続きグラント高校での授業体験がありました。3月17日は、セント・パトリック・デー(聖パトリックの祝日)というアイルランドの祝祭日の日で、アイルランドにキリスト教を広めた聖パトリックという聖人の命日が3月17日という事からこのような記念日が設立されたことを学びました。また、そのお祝いに緑色のモノを着用する慣習があるということで、この日は緑色のリストバンドを身に付けてグラント高校に向かいました。

この日は数学、英語、音楽、理科の授業に参加しました。特に2時間目に受けた英語の授業では、初めにタスクを20分で取り組む作業をした後、生徒1名が自分の興味関心に基づいたプレゼンテーションが行われ、私は野球がテーマのプレゼンテーションを聞きました。野球の発祥や歴史、選手のポジションについて分かりやすいスライドと簡単な説明で聞いている人の理解を促していたり、野球の凄さをアピールするために映像を流したり、プレゼンテーションで伝えたことをオーディエンスが覚えているかを確認するために4択問題を出したりと前日の私たちが行ったプレゼンテーションに問い入れるべき工夫や参考にすべき点が沢山あり、非常に学び甲斐のある内容だと感じました。

また、音楽の授業の後には避難訓練が行われ、周りの生徒の後を追うように外の広いグラウンドへ静かに移動しました。日本では火事や地震などのいつ発生してもおかしくない天災に備えて安全に、速く避難するのを重点的に避難訓練が行われます。しかしアメリカの場合は、地震などの自然災害は頻繁に起きないため、生徒は落ち着いて移動する一方であまり素早さを感じることはありませんでした。それと同時に、ニュースで報道されるような銃の乱射を初めとする緊急事態に対してはどのような対策や訓練が行われているのかについて興味を持ちました。

【7日目】

稲村 怜那(清田)・上城 穂乃和(大通)

この日は、午前にはリッチモンド小学校、午後にはオレゴン歴史博物館を訪問しました。リッチモンド小学校では、主に2年生と5年生との交流を深めました。授業は全て日本語で行われており、日付や数字などの簡単な日本語から、わたしたち派遣生徒との自由会話などが1日の内容でした。自由会話では、自己紹介の後、ポートランドのおすすめの場所や、行ってみたい日本の場所などについて深堀りをして、仲を深めることができました。授業体験を試してみた感想は、もう小学生の時点で日本語がとても上手な子どもたちもいて、何よりも印象的だったのが彼らのコミュニケーションを取ろうとする意識でした。間違いを気にせず話しかけてきてくれるのがとても嬉しかったし、間違いは怖くない！という意識を改めて感じる機会でした。

午後には訪問したオレゴン歴史博物館では、オレゴン州の先住民文化や開拓時代の生活、産業の発展などを、展示物を見たり、解説を聞きながら見学しました。「最初は多くの日本人がよりよい生活を求めて移り住んで、農業や林業、工場で働きながら暮らしていたが、日米関係が悪化したことにより自由を奪われた厳しい生活を強いられるようになった。」という話を聞いたとき、当時の人々がどれほどの不安や苦しさを抱えていたのかを解説と展示を通して感じることができました。また、自分たちと同じ日本人がアメリカでこのような経験をしていたことに驚き、歴史を学ぶことの大切さを改めて考えさせられました。

【8日目】

飯塚 南帆(開成)・日水 陵(啓北)

今回の研修において最後の活動日となったこの日は、マウント・テーバー中学校の訪問、バーチ・コミュニティサービスでのボランティア活動、そしてホストファミリーとの交流パーティーを行いました。

マウント・テーバー中学校の訪問では日本語の授業に参加し、生徒と交流しました。私たちが用意したプレゼンテーションも行い、それぞれのペアの探究テーマについて生徒の皆さんに質問する機会もいただきました。日本や日本語に興味をもったきっかけが1人1人異なっていて、聞いていてとても興味深かったです。

バーチ・コミュニティサービスは、経済的に余裕のないご家庭に向けて低額で食料や日用品を提供している施設です。さらに、お金のやりくりなどを学ぶことのできる講座なども開催しており、様々な取り組みを通じて低所得世帯の生活水準向上を目指しています。私たちは今回、寄付されたものの仕分けや品出しなどを行いました。

夜にはフェアウェルパーティーを開催しました。host studentのお友達も一緒に参加して短い期間でも深い友情を築くことができました。アメリカの文化でもあるフレンドリーさがあり英語での会話だけでなく、人間関係や日本との文化の違いについて現地でしか学べないことを学ぶことができました。パーティーでは、日本の文化である箸を使って豆をつかむミニゲームを行いました。アメリカでは箸はほとんど使われないので、みんな箸を使う新鮮さを楽しんでいました。最後にはホストファミリーみんなに感謝の気持ちを伝えることもでき、最終日にふさわしい一日となりました。

【9日目、10日目】

上垣 舞衣(大通)・陸井 翔太(平岸)

帰国へ向けて私たちは朝の7時にポートランド空港に集合し、各々のホストファミリーと最後の最後のお別れをしました。私たちの中にはもちろん、ホストファミリーの中にも涙を流している方々がいて感動的な時間でした。なかなか最後の別れの場を離れることができませんでしたが、飛行機の時間が迫っていることもあり、私達は保安検査へと向かいました、私はそこで櫛がナイフだと勘違いされてバッグを全部開けられました。感傷的な雰囲気から一気に現実に戻されましたが、これもいい思い出です。

その後私達はポートランド空港でご飯を食べたりお土産を買ったりしました。私は初めてポートランドのローカルのハンバーガー店 Burgerville で食事をしました。日本のマクドナルドとは違うバンズで美味しかったです。その後約1時間半のフライトでバンクーバー空港に到着しました。私達は次のフライトまでバンクーバー空港で最後のお土産を見たり、お菓子を買ったりしました。バンクーバー空港はすごく広くて時間があっという間に過ぎていきました。

成田空港までの約10時間のフライトでは私たちは長旅の疲れもありずっと寝てしまっていました。成田空港につくと私たちは10日間ぶりに日本語の看板や文字を見て、日本に帰ってきたことを実感して嬉しい気持ちになりました。日本の保安検査がすごく丁寧なことも改めて感じさせられました。約1日かけての移動の最後のフライト、成田空港から新千歳空港に着いたときは私たちの疲労はピークでした。みんな疲れすぎていて家に帰宅するやいなや爆睡したようで、その結果、あまり時差ボケはなかったようでした。私は10日間ぶりに家の愛犬に会えて涙が出ました。自分の家族の大切さにも改めて気付くことができました。

2. 「札幌×ポートランド探究」

○テーマ: 高校生×流行

「ポートランドと札幌の高校生の流行の共通点と相違点」

【森 香乃羽(啓北) 川辺 倫瑠(旭丘)】

1. 研修テーマ

ポートランドと札幌の高校生の流行に見られる共通点と相違点を調べるきっかけとなったのは、2025年の夏にポートランドからの留学生を受け入れた際に、アメリカでは季節や気候に合わせた実用性の高いコーディネートが重視される一方で、日本では実用性のあるコーディネートに加え、スカートやロングブーツなど個性を出した組み合わせをする人が多く見られると感じたことです。また、両地域の高校生が共通のSNSを通じて流行を取り入れている点にも注目し、両者の特徴を比較・分析したいと考えました。

2. 調査

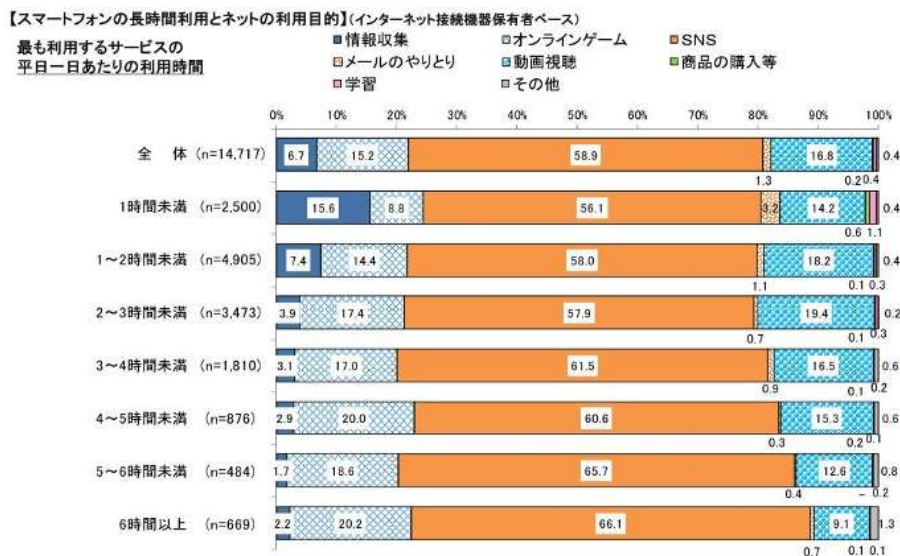
(1) 事前調査

① 日本の高校生の流行

食べ物では、手軽に食べられて見た目も楽しめるものが人気があり、特に期間限定商品が流行しやすい。例えば三角チョコパイ、アサイーボール、スターバックスの新作などがあります。次にアーティストでは、Mrs.Green Apple や back number、あいみょんなど、SNS や動画配信サービスを通じて人気を集めるアーティストが多く、恋愛に関する曲が流行しやすいです。インフルエンサーに関しては、TikTok や Instagram で活動するクリエイターが大きな影響力を持っており、ファッションやメイク、日常の過ごし方などの流行を発信しています。

② 日本の高校生の流行の傾向と考察

日本の高校生の流行は、SNS を中心に形成されており、特に TikTok などの短い動画をきっかけに広がる傾向が強いです。また、流行の対象はモノだけでなく、音楽やアニメなどのコンテンツにも広がっています。さらに、下図からわかるように一日の多くの時間を SNS を使って過ごすことから、SNS が流行の拡散に大きな役割を果たしていると考えられます。こうした背景には、友人との共有や共感を重視する高校生特有の価値観が影響しています。



(2) 現地調査

① ポートランドの高校生の流行

食べ物では、Boba というタピオカドリンク【画像 1】や日本と同様にアサイーボール、Dutch Bros という日本のスターバックスのようなお店の商品【画像 2】が人気があり、Taco Bell というメキシコ料理のお店【画像 3】が有名でした。

【画像 1】



【画像 2】



【画像 3】



次にアーティストでは Madonna の Give It 2 Me、Laufe y の From the Start、Charlie Puth の I Don't Think That I Like Her が流行っています。インフルエンサーに関しては、特定の有名な人は存在せず、色々なトレンドが存在しています。例えば Big guys pants okay というラップ楽曲の一部を引用し、オリジナルの力強い表現を意図的に誇張・コミカル化して身体表現に置き換えるものがあります。

② ポートランドの高校生の流行の傾向と考察

近年のアメリカの若者文化では、食、音楽、身体表現のいずれにおいても、プラットフォーム駆動型かつ参加型の流行が顕著です。アメリカの流行りの食文化は日本の若者文化と共通する「体験性・見た目の楽しさ・手軽さ」が重視されています。TikTok の普及により、楽曲はリリース時期やジャンルに関係なく再流行する可能性があります。短尺で印象的なフックとレトロ性が重視され、UGC での再利用性が現代のヒット形成を左右しています。インフルエンサーで特定の有名な人が存在しないのは、様々な社会的な背景を持った人を多様な価値観を受け入れる文化があるためだと考えられます。これらのことから、今の流行は SNS を通して広がり、誰でも参加できることが大きな特徴だと考えられます。

3. 考察・調査結果からわかったこと

今回の調査と考察から、ポートランドと札幌の高校生の流行は、どちらも SNS の影響を強く受けており、誰でも参加できる形で広がっていることが分かりました。特に、短い動画を通して音楽やダンスが流行する点や、見た目が良く写真映えする食べ物が人気である点は共通しています。一方で、ポートランドでは多様な文化が混ざり合い、個人が自由に表現する傾向が強いのにに対し、札幌では比較的まとまった流行が広がりやすいという違いも見られました。これらのことから、流行の広がり方は共通していても、地域の文化や価値観によってその内容や特徴が変化することが分かりました。

4. まとめ

今回の調査を通して、ポートランドと札幌の高校生の流行には共通点と違いの両方があることが分かりました。特に、SNS をきっかけに流行が広がり、誰でも気軽に参加できる点はとても似ていると感じました。一方で、ポートランドはより自由で多様な表現が多く、札幌はまとまりのある流行が広がりやすいという違いも印象的でした。これらのことから、同じような仕組みで流行が生まれていても、地域の文化や考え方によ

てその形が変わるのだと思います。今回の調査で、流行は世界でつながりながらも、それぞれの地域らしさがあることを学ぶことができました。今後は、SNS の影響がさらに強まり、流行の移り変わりもより加速すると考えられます。

5. 参考文献

高校生のネット利用時間

<https://resemom.jp/article/2017/04/03/37404.html>

ポートランド(オレゴン州)街のトレンド 2025 年

https://www.youmaga.com/portland/columns/trends/2025_p/

2050 年のニッポンの姿Ⅱ 世界が注目するポートランドのまちづくり

https://www.env.go.jp/policy/co2ta/content3/page2_1.html

【2025 年春の特大号】全 9 項目！最新トレンド TOP10！

<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000165.000026876.html>

○テーマ:スケーター×ファッション

「札幌とポートランドにおけるスケーターファッションの違い」

【飯塚 南帆(開成) 日水 陵(啓北)】

1. 研修テーマ

札幌とポートランドにおいて、スポーツがファッションにどのような影響を与えるのか、地域差とスケートボードに着目しながら探究したいと考えました。

2. 調査

(1) 事前調査

①ポートランドの文化

ポートランドの文化を象徴する有名なフレーズが“Keep Portland Weird”、日本語で「変わり者で行こう」です。周りと違うものを淘汰するのではなく歓迎し、個性の尊重が重視されています。その言葉にも表れているように、ファッションやライフスタイルなどの自由さがポートランドの文化の特徴の1つです。また、自然体・本物志向であることや、地元を大切にすることの強さも特徴的で、古くなった様々な建物をリノベーションし、そのままの形で守っていく取り組みも進んでいます。

②スポーツとファッションの関わり

ファッションの流行は「アルゴリズム化」されているということが分かりました。つまり、毎回決まった手順で流行がつくられているということです。アルゴリズムによっておすすめの投稿を表示するSNSの発展により、それがより顕著になりました。しかし、流行の形成の仕組み自体は昔から変わっておらず、情報の発信源かコラムニストかSNSかという違いがあるだけだそうです。また、多くの人が好むファッションスタイルの傾向として、「目立たない」という特徴があると言われており、特に日本では周りから浮かない、目立たない色やデザインのもものが好まれることが多いです。

そして、スポーツファッションの原点はとてもシンプルで「動きやすさ」でした。19世紀のイギリスでは、サッカーやテニスなどの近代スポーツが誕生します。それまでは、運動するための服という考えがほとんどありませんでした。しかし、スポーツが広まるにつれて、「走りやすい」「汗を書いても大丈夫」といった競技専用のウェアが作られるようになります。これがスポーツファッションの始まりです。次に1920～50年代になると、スポーツ選手がスターとして人気を集めるようになります。その影響でスタジャンやスウェット、スニーカーが競技用だけでなく普段着として街に広がっていきました。1970～90年代には、スケートボードやヒップホップなどのストリート文化が登場します。NIKE、adidas、Vansといったスポーツブランドは、スポーツ用品メーカーでありながら、ストリート文化の中心的存在になっていきます。ここで、スポーツファッションは単なる運動着ではなく、ライフスタイルや価値観を表すファッションへと進化しました。そして現代では、スポーツブランドの服が日常服として完全に定着しています。このようにスポーツファッションは「運動の服」から「おしゃれの服」へと進化していきました。

③スケーターファッション

スケーターファッションの始まりは、1960年代のサーフ文化です。波がない日にサーファーがスケートボードを楽しんだことからTシャツやショートパンツ薄手のパーカーなど、動きやすさを重視した服装が定着しました。1980年代になるとスケートはストリート文化として広がり、パンク文化の影響を受けます。チェックシャツや太めのパンツなど、反体制的で自由なスタイルが好まれるようになりました。1990年代には、ヒップホップ文化の影響で、ルーズでオーバーサイズなスタイルが流行します。スケーターファッションは、自己表

現の一部として確立されていきました。2000年に入ると、Supreme や Palace といったスケーターブランドが注目され、ファッションシーン全体に広がっていきます。そして、2020年代にはスケートボードがオリンピック競技となり、スケーターファッションはさらに多くの人に受け入れられるようになりました。このようにスケーターファッションは、時代や文化とともに進化していきました。

(2) 現地調査

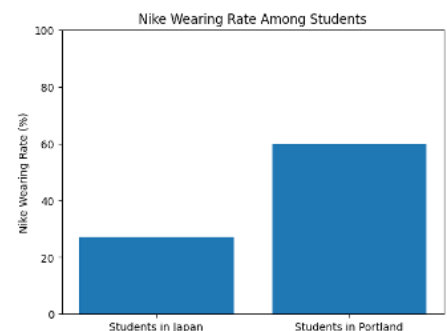
① インタビュー

グラント高校やマウント・テーパー中学校の生徒にファッションについてのインタビューを行いました。人気があるスポーツブランドとしては、日本でも認知されている NIKE や adidas、lululemon などが挙げられていました。特に NIKE が人気の理由として、オレゴン州発祥のブランドであることがあり、地元を大切にしているポートランドの人の価値観が表れていると感じました。

また、ファッションに関する質問として、日本で人気のあるユニクロを利用するかどうか尋ねたところ、アメリカではユニクロの服の値段が高いため、日本を訪れた際に利用することが多いとの声がありました。アメリカでの物価の高騰などの経済的要素も関係していることが分かりました。さらに、ファッションを含めた流行はどのように変化するか質問したところ、TikTok を中心とした SNS の影響力が大きいという日本と類似した傾向があるという情報がありました。世界的な SNS、インターネットの発達は様々な分野に影響を与えているということがよく表れていると感じました。

② 現地の人の服装を観察

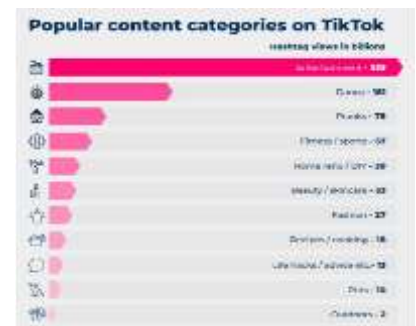
街や学校で、人々の服装を観察しました。最も大きな特徴の1つとして、カジュアルな服装やスポーツウェアを着ている人が多かった印象です。その中でも世界的に有名な NIKE がポートランドでも人気であることがわかりました。その理由を聞いてみたところ、NIKE はオレゴン州発祥のブランドだということがわかり、みんな地元のブランドを愛しているようです。



3. 考察・調査結果からわかったこと

日本とアメリカで人気の NIKE の着用率を調査したところ、日本は競合ブランドが多いため 20%程度でした。NIKE はアメリカ発祥のブランドなのでアメリカでは 60%で 2人に1人は NIKE を着用していて、日本に比べて圧倒的に多いことがわかりました。

また、TikTok で人気のジャンルを調査したところ、スポーツとファッションはいずれも数あるジャンルの中で比較的上位にいたることがわかりました。年齢層を絞らずに見るとファッションについてのコンテンツを視聴する人は 27%ですが、現地でのインタビューにおける結果を考えると、10代にはファッションのコンテンツが人気があると考えられます。



4. まとめ

私達は、スポーツはファッションとどのように関係しているのかをテーマにし、実際にポートランドの学生に聞き、調査しました。

スポーツとファッションのつながりでは、NIKE や Columbia のようなオレゴン州(地元)のブランドが人気だということがありました。

スケートボードの面では、ポートランドのスケートボードパークに行ってみたところ、スケートボードのために作られたブランドを着ている人がほとんどでした。このようにポートランドでは地元のブランドや自分がやっているスポーツに関係しているブランドが好まれていることがわかりました。

5. 参考文献

- 山本彌生(2022,4,15). 『ポートランド・スタイル』自分らしく、IKIGAI を手にいれる旅. Retrieved 2025, February 16th from https://www.newsweekjapan.jp/worldvoice/yamamoto/2022/04/ikigai.php#goog_rewarded
- 小野アムスデン道子(2017,3,17). 全米でも日本でもモテる街、ポートランドの秘密 . Retrieved 2025, February 16th from <https://www.nikkei.com/article/DGXMZO13586690S7A300C1000000/>
- JULIA HOBBS(2024,7,3). アルゴリズム化するファッショントレンド。私たちはなぜ、同じような服を着るようになったのか . Retrieved 2025, February 16th from <https://www.vogue.co.jp/article/fashion-trends-going-viral>
- ITOI KURIYAMA, YUI SUGIYAMA(2024,6,24). スポーツ×ファッションが今、熱い！知っておくべき歴史的トピックスとその未来 . Retrieved 2025, February 16th from <https://www.vogue.co.jp/article/fashion-sport-history>
- 山本幹(n.d.). スポーツがファッションカルチャーに与えた影響 . Retrieved 2025, February 16th from https://www.juntendo.ac.jp/assets/maneka_20191316067.pdf
- マルイ編集部(2025,12,27). スケートファッションとは？人気の着こなしやマストバイアイテムを紹介！ . Retrieved 2025, February 16th from https://voi.0101.co.jp/voi/content/01/sp/topics/column/column_407.html
- きのあや(2024,6,29). スケートファッションってどんなもの？ | 文化と歴史 . Retrieved 2025, February 16th from <https://kld-c.jp/blog/what-is-skate-style>
- Amina Maina(2026,3,11). SHOULD YOUR BUSINESS BE ON TIKTOK? . Retrieved 2026, April 3rd from <https://www.rebootonline.com/blog/should-your-business-be-tiktok/>
- Tariqul(2025,2,13). Nike Shoes: What Percent of the U.S. Wears Them? Market Share and Consumer Insights . Retrieved 2026, April 3rd from <https://decentfoot.com/what-percent-of-the-u-s-wears-nike-shoes/>

○テーマ:名物×地元のスーパーマーケット

「札幌とポートランドのスーパーマーケット比較から分かる文化の違い」

【下山 琉奈(新川)・立松 美来(平岸)】

1. 研修テーマ

小学生の頃、神奈川県から北海道へ引っ越して来ました。その際、同じ日本なのに売っているものの種類や売られ方に小学生でもわかるほど違いがありました。今回、テーマを選ぶにあたりそのことを思い出し、日本国内でもこんなに違いがあるならば、日本とアメリカではもっと顕著な違いがあるのではないかと考えたため、このテーマを選びました。

2. 調査

(1) 事前調査

最初に、日本(ここでは札幌をメインとする)アメリカのスーパーでの違いをインターネットで調べました。そこで見つけた違いのうち大きいものの理由を主に調べることにしました。一つ目は、サイズの違い。二つ目は価格の違いです。

一つ目のサイズの違いは、日本よりもアメリカの方がサイズが大きいと言う前提で調べました。この理由を知るためにまず注目したのは、1週間でスーパーマーケットへ行く回数です。調べた結果、アメリカの平均は1.6回、日本の平均は2.8回でした。ここから考えられるのは、アメリカは1度で1週間分くらいの量を買わなければいけないため、量が多いということです。次に注目したのは、コストパフォーマンスです。アメリカはかつて、産業革命期に大量生産、大量消費で経済力を上げ、世界的な経済国へと成長して来ました。その頃から大量に生産し、大量に消費する文化が染み付いており、現在のスーパーマーケットにも関係しています。そのため、人々の中に昔からの「大容量→お得」という認識があり、サイズの大きいものが主流だと考えられます。

二つ目の価格の違いは、最初私たちはアメリカと日本ではアメリカの方が高価であるという考えで調査を始めました。アメリカの特に加工食品は日本よりも高価なものが多く、これには人件費が大きく関与していると考えられます。例えば、日本ハムの工場でのアルバイトだと、時給はだいたい1100~1200円ですが、一般的なアメリカのハムなどを作る工場の時給はだいたい2200円~3000円でした。すると、日本とアメリカの人件費の違いは同じくらいの人数を雇っているという前提で考えると、2,3倍なので、商品価格も2,3倍となると考えられます。他にも、価格が高い理由にはアメリカの国土が日本よりもかなり広いというところにあると考えました。60サイズの荷物を日本国内で沖縄から北海道へ輸送した場合、だいたい1800円ほどですが、アメリカ国内でポートランドからニューヨークへ輸送した場合、重さ計算が基本なので変動はありますが、1500~4500円かかります。これは、アメリカ国土の広さゆえの燃料費、人件費が原因です。

(2) 現地調査

① 現地の方へ質問

ポートランドでは、ポートランド領事館の総領事や職員の方、ホストファミリー、訪問した学校の生徒へ質問をしました。

最初にお会いした総領事や職員の方には「ポートランドのスーパーの特徴」と「日本とポートランドのスーパーの違い」について説明しました。まず、「ポートランドのスーパーの特徴」については、商品の値札に

「ORGANIC」や「PNW LOCAL」と書いてあるステッカーが貼ってあることが多いことだとおっしゃっていました。



「PNW LOCAL」の「PNW」とは「Pacific North West(ワシントン州、オレゴン州を中心とした、北米西海岸北西部地域)」の略です。

次に「日本とポートランドのスーパーの違い」は商品サイズ、スーパーではないが、ファーマーズマーケットが盛んであると教えてくださいました。

次に、ホストファミリーに「買う商品でお店を変えているのか」「商品を買うときに考えていることはあるのか」「一週間で何回くらいスーパーへ行くのか」の3つを質問しました。1つ目の「買う商品でお店を変えているのか」については、商品で決めることはあまりせず、距離やセールで決めると言っていました。2つ目の「商品を買うときに考えていることはあるのか」には、できるだけ地元産のものを買うようにしていると言っていました。3つ目の「一週間にスーパーへ行く回数」は2, 3回でした。

最後に、現地の学校の生徒には「一週間で何回スーパーへ行くか」「どのスーパーへよく行くのか」を聞きました。「一週間でスーパーへ行く回数」はマウント・テーバー中学校とグラント高校をあわせて約30人の平均が2~3回でした。「どのスーパーへよく行くか」はQFCやNEW SEASON、スーパーではないが、ファーマーズマーケットが多いという結果になりました。QFCもNEW SEASONも全米展開しているコストコのようなチェーン店ではなく、PNWを中心のチェーン店です。



②実際にスーパーへ行く

私達は、ホストファミリーに協力してもらい滞在中に計5つのスーパーへ行きました。そこで気がついたことは、「商品のサイズが大きい」「日本のような小さいスーパーや地域密着型のスーパーもある(北海市場のような)」「日本に比べてパスタやパンが多い」「野菜や果物で袋詰めされてるものが少ない」「カートがとても大きい」「小さめのスーパーにはサラダバー、スープバーがある」「七割以上が地元産のもの」という点がありました。

3. 考察・調査結果からわかったこと

ポートランドのスーパーには、「地元産の商品にマークが貼ってある」「ファーマーズマーケットが盛んに行われている」「日本のような小さいスーパーも多い」「行く回数が多い」「地域に根ざしたスーパーがある」という点がわかりました。渡米前に考えていた、「行く回数が少ない」や「スーパーは何もかもが大きい」という予想からは、離れていたものも多く、そこに地域性を感じました。しかし、商品サイズが大きいことや値段が高いというものはある程度あっていました。また、サラダやスープ、お菓子などの量り売りを行っているお店が多く、地元文化の影響が強いこともわかりました。

4. まとめ

ポートランドのスーパーマーケットは地元の文化や特性によく根付いており、地元民も地産地消意識が高いことから、スーパーマーケットは地域に密接に関係しているということがわかりました。日本との違いは思ったよりも少なく、それは姉妹都市であることが一因となっているのかなとも感じました。予想に反して日本のスーパーマーケットとの顕著な違いはありませんでしたが、スーパーマーケットを通じてポートランドの人々の考え方やアイデンティティを学ぶことができました。

5. 参考文献

日本人も大好き！ワシントン&オレゴン御用達のスーパーマーケット

https://www.youmaga.com/feature/2004_supermarket_01/

留学で見たアメリカのスーパーマーケット事情 サイズ感だけではない違いがたくさん

https://news.infoseek.co.jp/article/toushin1_50186/

飲み物のサイズが違う？アメリカの飲食文化カルチャーショック集

<https://wirelessgate.com/travel/media/%E9%A3%B2%E3%81%BF%E7%89%A9%E3%81%AE%E3%82%B5%E3%82%A4%E3%82%BA%E3%81%8C%E9%81%95%E3%81%86%EF%BC%9F%E3%82%A2%E3%83%A1%E3%83%AA%E3%82%AB%E3%81%AE%E9%A3%B2%E9%A3%9F%E6%96%87%E5%8C%96%E3%82%AB%E3%83%AB/>

○テーマ:「語学学習」

「互いの文化と繋がる言語学習法」

【稲村 怜那(清田)・上城 穂乃和(大通)】

1. 研修テーマ

近年グローバル化が進む社会のなかで、私たちは日本人の英語学習方法に日々疑問を持つことが少なくありませんでした。そんな疑問は、ポートランド派遣が決定してから私たちの中でとても強くなっていったため、今回はこのようなテーマを持って渡米することに決めました。

私たち日本人は、義務教育から英語を習いますが、どうして英語を話す日本人がこんなにも少ないのでしょうか。世界共通言語であるにも関わらず、日本人の英語学習への抵抗が大きいように感じます。

私たちは、これらの原因が主に学校の英語学習にあるのではないかと考えました。そこで、日本の英語学習方法と、日本語イマージョン教育を行っているポートランドの日本語学習方法を比較してみることにしました。また、日本とアメリカの文化の違いを利用して、互いに効果的な言語学習法を提案することにしました。

2. 調査

(1) 事前調査

日本人の英語力は実際にどんな感じなのかと調べてみると、2024年の英語力調査では、116カ国中92位でした。また、別の調査も観てみると、日本の80%以上の中高生が日本の英語教育に問題があると感じていることもわかりました。



特に、日本語教育にある問題点をあげるとすれば、それは「音声学習」が圧倒的に足りていないことです。どうしてもテストや受験に向けた授業を行うと音声学習、主にスピーキングの練習がおろそかになってしまう傾向があるようです。よって実際に英語を話す人が少なくなってしまうのではないかと考えました。

これらの現状をふまえたうえで、現地では主に彼らの日本語の授業での学習方法や、その取り組み方についてよく調査したいと思いました。

(2) 現地調査

私たちは、まずポートランドに着いてから現地の小学校、中学校、そして高校を尋ねる機会がありました。私たちは主に、それぞれの日本語クラスに参加し、授業体験を通して日本語の学習方法を知ることができました。

はじめに訪れたグラント高校の日本語クラスでは、まず授業の最初に、日本の有名な曲(アニメソングなどを先生とともにみんなで歌う時間がありました。歌の時間が終わると、次に日本の江戸時代の天才絵師・

葛飾北斎の知られざる生涯を描いた映画「HOKUSAI」を視聴し、映画に出てきた日本の歴史を学んだり、映画のなかでのセリフをペアと読み合ってみたりなど、アクティビティのバリエーションがとても豊かな印象を受けました。また、高校で気がついたことは、日本語の授業中は日本語以外の言語を話してはいけないということです。生徒たちに自主的に発言させるような場面も垣間見ることができました。

次にリッチモンド小学校では、主に最高学年のこどもたちと研修生が自由にコミュニケーションをとる機会がありました。授業のスタイルは、先生がクイズや動画を子供たちに見せて、楽しみながら日本語を勉強している感じでした。また、それ以外にも日本語で文を書いたり、漢字を練習したりするなど日本人の日本語教育と同じように、基礎的な活動を行っていました。

マウント・テーパー中学校の日本語クラスでは、私たちの研究テーマの発表を行いました。私たちの提案した言語学習方法は、アニメと洋画を使った方法でした。それぞれを互いの言語である英語・日本語で観ることで、互いの国の文化も知ることができつつ、日常的な生きた言語を楽しく学ぶことができるのではないかと考えたからです。なんのアニメが好きか、という質問を学生たちになげかけたところ、ジブリとワンピースがダントツで人気でした。

3. 考察・調査結果からわかったこと、今後の展望

私たちは、今回のポートランド派遣を通して、ポートランドの日本語学習法を知ることができました。相違点を学んだ今、改めて日本の英語学習と比較して1番異なると感じたことは、やはり「音声学習の機会」についてでした。ポートランドの日本語授業では、学んだことをアウトプットする場面が非常に多く、声に出して学習することの大切さを改めてよく知ることができました。

それに加えて、日本語を教える先生はすべて日本人で、ネイティブの日本語が常に聞ける環境はとても素晴らしいと感じました。

帰国後、これらの新しい学びから、日本の英語学習方法の問題点がよりあらわに感じられました。これらの経験を通して、実際に日本にいても以下のような活動に取り組むことで英語学習がより効率的になるのではないかと思います。

- ・ALT の時間を増やす
- ・発音の練習をする
- ・英語で映画、アニメを観る

これからも、楽しく効果的な言語学習に迫れるよう、探究を続けたいと思います。

4. 参考文献

『英語学習の調査結果』中高生の 85%が日本の英語教育に不満 | 高校生向け受験応援メディア「受験のミカタ」

<https://www.kknews.co.jp/news/251121yt01#:~:text=%E3%80%8C%E8%A9%B1%E3%81%99%E3%83%BB%E6%9B%B8%E3%81%8F%E3%80%8D%E8%83%BD%E5%8A%9B%E3%81%8C,%E3%81%A8%E3%81%AA%E3%82%8B%E3%80%8D%E3%81%A8%E8%AA%9E%E3%81%A3%E3%81%9F%E3%80%82>

英語 4 技能で最も課題なのは「スピーキング」 英語学習コーチング「PROGRIT(プログリット)」が英語学習における課題を調査 | 株式会社プログリットのプレスリリース

<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000034.000020729.html>

○テーマ:交通について

「高校生の視点で見た札幌とポートランドの交通事情」

【長谷川 司(清田) 大竹 美羽(旭丘)】

1. テーマ設定の理由

ポートランドは「自転車に優しいまち」として知られています。また、ポートランドは自動車よりも歩行者、自転車、公共交通を優先したまちづくりを進めています。私達は普段は自転車で通学し、冬期は公共交通機関を利用して通学しています。通学する中で危険や不便さを感じることもあり、より安全で便利な交通はどのようなものか知りたいと思うようになりました。そして、「自転車に優しいまち」と呼ばれてるポートランドではどのように自転車の取り組みがされているか、またポートランドではどのように通学しているのかに注目し調べることにしました。

2. 事前調査

①札幌の交通やサービスについて

札幌では、地下鉄、バス、路面電車、JR を中心とした公共交通機関が、今日の札幌市の移動を支えています。サービスに関しては、地下鉄の場合、週末・祝日・年末年始(12月29日～1月3日)限定で、幼児260円、大人520円で購入できる”ドニチカキップ”が札幌市民のみならず、札幌を訪れる観光客の移動をも支えています。

②札幌の雪対策について

札幌では路面凍結に対し、砂を撒くことで対策しています。大雪の日は雪のためバスの遅延があります。除雪がなければバスは運行することができなくなってしまいます。しかし、除雪事業者の不足により除雪が追い付かず、大雪が降った2023年には市民からのクレームが30000件にのぼりました。

③札幌の自転車について

日本では2026年の4月1日から自転車に青切符制度が導入されます。交通違反例は歩道走行、無灯火運転、傘さし運転、ながら運転などです。札幌市中心部では自転車の走行位置と方向を示した路面表示の設置を進めています。また、車のドライバーに路上駐車を少なくするようチラシなどで呼びかけ、自転車が安全に走行できるよう取り組んでいます。

3. 現地調査

①自転車について

ポートランドの自転車レーンは段差【画像1】があり、車が入れないようになっていました【画像1】。中学生によると自転車レーンは都市中心部にはあるがそれ以外にはないそうです。電車やバスなどに自転車置き場がありました。ポートランドで道路を横断するとき全ての車が道を譲ってくれました。

派遣の5日目から8日目までの4日間は、自転車に乗り、グラント高校まで移動しました【画像2】。アメリカではめったにできない経験でしたが、運転中にハンドジェスチャーをすることに加えて、傾斜のある坂道を何本も上らないといけないため、集中力の維持に苦労したのと同時に、札幌での通学とは比較にならないほど、移動の過酷さを感じました。

ホストステューデントの話によると、自転車通学の割合の多い札幌とは違い、グラント高校では、親の送迎(=車)・徒歩で通学する人が多く、自転車通学の人全体の1割も満たないということが分かりました。(グラント高校の生徒は約2100人) 通学という観点から日本とアメリカの違いを学べたのと同時に、公共交通機関をテーマに事前研修をしてきた中で、貴重な情報を得る事ができたのではないかと思います。

【画像1】



【画像2】



②通学、移動について

中学生に通学について尋ねると普段の移動手段はスクールバスや徒歩が多いと答えてくれました。現地で通ったグラント高校はバスや車で登校する生徒が多いそうです。

2日目のシティーウォークでは、バスとMAXという路面電車に乗車しました。乗車するには、TRIMET(トライメット)という交通局の販売するチケットを購入し、その日以内に持っていれば、無料で乗車できるというサービスがありました。

特に、バスに関して発見した事がありました。一つは乗車・降車時の対応の違いで、札幌の場合、交通系ICカードを持参する場合、乗車・降車時に、機械にタップする、または、乗車時に乗車券を取って降車時に運賃と一緒に、支払い箱に入れるのが主流です。ポートランドでは、乗車時に、ドライバーに買いたい切符を伝え、お金を払って購入すれば、降車時は何もせずに降りるのが当たり前でした。(高校生の場合、3ドルのワンデーチケット)ただ、最初の乗車時に、乗車券をタップするための機械の破損が原因で、無賃で乗車するという珍しい出来事がありました。また、降車を知らせる時は、札幌ではボタンを押しますが、ポートランドでは、窓に横に掛かっている黄色い紐を引く事で知らせられるという違いも発見しました。

4.考察

①自転車について

ポートランドの自転車のルールや整備状況は日本に近いと感じました。特別に何か対策をしているというより、車両が自転車や歩行者に配慮をして走行しているというのが大きいと思います。しかし、「バスや電車に自転車置き場がある」というのは日本にはない取り組みです。また、札幌の青い道路表示【画像3】は自転車だけが使える道路というわけではありません。ポートランドには【画像4】のように自転車だけが使える道路があり、自転車と車両は距離を保つことができます。

②通学について

私達が訪れたグラント高校には自動車に通学している生徒がいました。日本では自動車の免許を取得できるのは18歳以上で、ポートランドでは16歳以上が免許を取得できます。加えて、ポートランド市内の一部に、自転車専用ロードがありながら、グラント高校の生徒のほとんどは車、あるいは徒歩で通学するという事から、その需要は全年代に必ずしもあるとは限らないという事でした。

【画像3】



【画像4】



参考文献・出典

札幌市「道路維持管理基本方針」

<https://www.city.sapporo.jp/kensetsu/doroi/jikanrikeikaku.html> (2026年4月3日閲覧)

札幌市「除排雪作業の種類」

<https://www.city.sapporo.jp/kensetsu/yuki/sagyou/type/index.html> (2026年4月3日閲覧)

札幌市「(1)目的別・手段別の発生集中率 4-札幌市」

https://www.city.sapporo.jp/sogokotsu/shisaku/sogokotsukeikaku/h24plan/documents/1_2-2.pdf (2026年4月3日閲覧)

札幌市建設局総務部自転車対策担当課「自転車通行位置の明確化」

<https://www.city.sapporo.jp/kensetsu/dokan/jitensha/tsukoichi.htm> (2026年4月3日閲覧)

札幌市建設局雪対策室事業調整担当課「第2回 持続可能な生活道路 除排雪の在り方検討会」

<https://www.city.sapporo.jp/kensetsu/yuki/new/documents/zkzk2-4.pdf> (2026年4月3日閲覧)

○テーマ:街にある自然

「街にある自然 ～さっぽろ&ポートランドの公園比較」

【宮崎 咲良(新川)・米谷 心一朗(藻岩)】

○研修のねらい

今回の研修では、ポートランドと札幌における身近な公園や自然環境の違いに注目し、それぞれの特徴や人々の関わり方について理解を深めることをねらいとした。実際に現地の公園を訪れ、自然の多さや使われ方を観察するとともに、日本との違いを比較することで、その背景にある文化や価値観について考察することを目的としました。

○取り組み内容

① なぜこのテーマを選んだのか

事前調査では、ポートランドと札幌は街の様子が似ていると学びました。また、ポートランドは自然がとても豊かな街であると聞き、実際にどのような違いがあるのかに興味を持ちました。そこで、身近にある公園や自然環境に注目し、札幌と比較することで、それぞれの特徴や違いを明らかにしたいと考え、このテーマを選びました。

② どのような視点で調査したか

本探究では、「どのような人が利用しているのか」「公園の使われ方」「なぜその公園が人気なのか」といった視点から比較を行いました。また、公園が人々の生活の中でどのような役割を持っているのかにも注目し、日本での普段の生活と照らし合わせながら違いを考察しました。

③ どのような方法で調査したか

事前に札幌の公園や自然環境について調べたうえで、現地ではシティウォークや大学訪問の際に街や公園の様子を観察しました。また、実際に公園で過ごす人々の様子や利用の仕方を見ることで、資料だけでは分からない違いを把握しました。

さらに、自分自身が現地で感じた「におい」や「色」などの気づきも記録し、それらをもとに日本との比較を行いました。

④ 調査結果

札幌の「中島公園」は中心部に近く、5,000本もの木々や池があり、秋には綿あめのようなカツラの木の甘い香りが漂うなど、五感で自然を感じられる場所です。

一方ポートランドでは、マウント・テーバー公園とワシントンパークを訪れました。ワシントンパークは観光客も多く訪れる大規模な公園で、園内を車で回れるほど広く、バラ園や日本庭園などの施設が充実しています。対して、地元の人に親しまれているのはマウント・テーバー公園でした。自然の地形を生かした広々とした空間で、芝生で自由に過ごしたり運動したりする姿が多く見られました。

また、現地ではベンチやレンガに市民の名前が刻印されているのを見つけ、市民の公園への愛着の深さを感じました。さらにリスなどの野生動物を頻繁に見かけるなど、日本の公園よりも自然との距離が近いと実感しました。

⑤ 考察

札幌の公園は整備が行き届いており、「整えられた自然」という印象が強かったです。一方でポートランドでは、山や森林といった自然がそのまま活かされており、「自然の中に街がある」と感じられる環境でした。

このような違いは、ポートランドが地産地消を大切にするなど、自然と共に生活する意識が高いことが関係していると考えられます。市民の名前が刻印されていることから、自分たちで公園を作り、守るという価値観が根付いていることがうかがえます。

○探究を通して

今回の探究では、札幌とポートランドの公園に注目し、それぞれの特徴や違いについて理解を深めることができました。これまで当たり前だと思っていた環境も、場所が変わると大きく異なることに気づきました。

また、インターネットで調べるだけでなく、実際に現地を訪れ、自分の目で見て、空気やにおいを感じることの重要性を強く実感しました。今後もこの経験を活かし、多角的な視点で物事を捉えていきたいと考えています。

○参考文献

札幌市公式ホームページ

<https://www.city.sapporo.jp> (2026年4月3日閲覧)

Tripadvisor (ポートランドの観光地情報)

https://www.tripadvisor.jp/Attractions-g52024-Activities-c57-Portland_Oregon.html (2026年4月3日閲覧)

Travel Portland (ポートランド観光公式サイト)

<https://www.travelportland.com> (2026年4月3日閲覧)

中島公園 公式サイト(札幌市公園緑化協会)

<https://www.sapporo-park.or.jp/nakajima/> (2026年4月3日閲覧)

Explore Washington Park

<https://explorewashingtonpark.org/> (2026年4月3日閲覧)

○テーマ:「スポーツを行う環境」

「スポーツの楽しみ方と環境 -札幌とポートランドの比較から見えるもの-」

【佐藤 結(藻岩)・山本 祐綺(開成)】

1. 探究テーマ

私たちは幼少期からスポーツを習っており、現在も競技スポーツをプレーしています。しかし、高校生になり、スポーツチームを離れる友達が増えたり、新しいスポーツを始めることが難しく感じたりすることが多くあり、競技としてのスポーツではなく、楽しむためのスポーツをする環境が足りてないのではないかと考えました。そこで、ポートランドではどのようなスポーツをする環境があり、それは人々のスポーツの楽しみ方にどのように影響を与えるのか探究することにしました。

2. 調査方法

渡航前は、インターネットでの調査やアンケート調査を行い、主に日本の中高生のスポーツ習慣やスポーツをする環境について調べました。ポートランドでは、ダウンタウン、在ポートランド領事事務所、マウント・テーパー中学校、グラント高校などを訪れ、観察やインタビュー調査を行いました。

3. 調査結果

(1) 札幌のスポーツについて

①運動習慣

札幌市スポーツ推進審議会(2023)によると、週1回以上運動を行う人は約92%であるのに対し中学生は約68%で、約62%の中学生が運動不足を感じていることから、中学生・高校生になると運動習慣がなくなりやすいことがわかります。

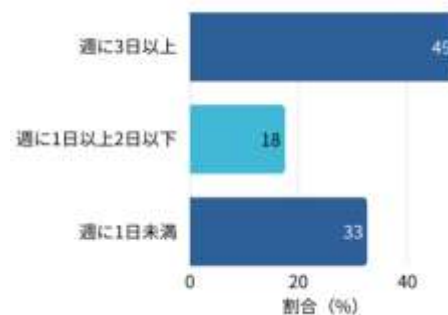
【図1】は中学生が運動をする頻度を示していて、小学生や大人と比較して、中学生は運動習慣の二極化が起こっているという特徴がわかります。

市立高校2年生の約50人にアンケートをとったところ、約80%の人が日常的に運動をしていて、その中でも、部活動で運動している人が多いということがわかりました。札幌市立学校に係る部活動の方針では、健やかな心身の育成が部活動の軸となっており多様なニーズの理解を求めています(札幌市教育委員会, 2020, March)、多くの部活動で競技スポーツとしての活動が行われているのが現実であり、楽しむためのスポーツをできる環境ではないといえます。

②スポーツを始めること

市立高校2年生の約50人にとったアンケートでは、やったことのないスポーツを始めることに不安を感じる人は約30%でした。18歳以上の人が新たにスポーツを始めるために重要だと思うこととして、スポーツをする場所、一緒にスポーツをする仲間、自分にあった種目(札幌市スポーツ推進審議会, 2023)が挙げられ、誰かとスポーツができる環境が重要であることがわかりました。

【図1】



注)札幌市スポーツ推進審議会(2023)のデータより作成

(2) ポートランドのスポーツについて

①領事事務所訪問

ポートランドではハイキング・ジム・ランニングが盛んであることがわかりました。

②ランニング・サイクリングが盛んな理由

領事事務所でのインタビューだけでなく、シティウォークでもランニングやサイクリングが盛んであることがわかったため、その理由を調査しました。

1つ目の要因として交通ルールが挙げられます。歩行者優先が徹底されていて、横断歩道がない場所でも道路を渡ろうとすると車がすぐ止まってくれるため、ランニングがしやすいです。また、【図2】のように、バスや電車などの公共交通機関への自転車の持ち込みが気軽にできるため、サイクリングがしやすいです。

【図2】 自転車を運べるバス



2つ目の要因として街づくりが挙げられます。街が基盤の目状の作りでコンパクトなブロック構造になっており、移動による景色の変化が生まれやすい、道に迷いづらいなど、ランニングやサイクリングを楽しみやすい街であるといえます。ポートランドには、都市成長境界線という都市部と農地や森林などの土地利用を区分する仕組みが導入されており、公共サービスや都市機能が都市部に集約されているという特徴があります(環境省, n.d.)。これにより、ランニングやサイクリングが楽しみやすいだけでなく、自転車が日常的な移動手段として選ばれやすいことが考えられます。

③マウント・テバー中学校での調査

中学生の間では、フットボール、バレーボール、バスケットボールなどが人気のスポーツであることがわかりました。スポーツをプレーする環境について聞いてみると、中学校には部活動がないため、学校外のクラブチームに所属する人が多いことがわかりました。ポートランドには多くの種目のクラブチームがあること、チームに所属せずに、公園などで友達とスポーツを楽しむ人も多くいることがわかりました。

④グラント高校での調査

約30人の高校生に聞いたところ、9割以上の方がスポーツが好きで一週間に一回以上運動していることがわかりました。高校生の間ではバレーボール・スキーが人気で、クラブチームに所属している人と部活動に所属している人がいます。

グラント高校では生徒が申請をすれば部活をつくることができます。全校生徒も2000人ほどいるため多くの部活動があり、多様なスポーツに取り組むことができる環境があります。ホスト生徒の部活動の活動時間は1時間30分で私たちの学校での活動時間より短く、また、準備運動も行わないため、楽しむことが目的であることがわかります。さらに、授業終了時刻が早く、テニスコートなど複数のスポーツグラウンドがあるなど環境が整備されています。そのため、やりたいスポーツを気軽に始めやすいような環境が学校にあることがわかりました。

4. 考察

札幌については、高校生になるにつれてスポーツを通じた人との関わりが減る、中学生と高校生の運動習慣が二極化しているということがわかりました。ポートランドについては、街のつくりとスポーツ習慣には関連性があり、市民の日常的な運動につながっていることがわかりました。また、スポーツクラブと学校の部活動の環境が整備され、役割が棲み分けされており、高校生が、競技スポーツをする環境と楽しむためのスポーツをする環境が確立されているため、スポーツが盛んに行われており、スポーツをすることが好きな高校生が多いのではないかと考えられます。

5. 研修を通して

ポートランドでは、部活動が競技スポーツをするための環境ではなく、楽しむためのスポーツをすることができるため、競技場などの環境が整備された場所で気軽にスポーツを始められるということが衝撃的で、素敵な仕組みだなと思いました。

グラントの部活動では顧問がいない、札幌の部活動では多様なニーズの理解が求められるなど、両市の間には部活動の目的や活動形態などの違いが存在するが、札幌市で楽しむためのスポーツを気軽にできるような環境が確立され、高校生がスポーツをより好きになればよいなど考えました。

6. 引用文献

環境省 (n.d.). *2050 年のニッポンの姿 II 世界が注目するポートランドのまちづくり*. 低炭素社会に向けた社会転換を考える CO2 テクノロジーアセスメント. Retrieved April, 9, 2026, from

https://www.env.go.jp/policy/co2ta/content3/page2_1.html

札幌市教育委員会 (2020, March). 札幌市立学校に係る部活動の方針. 札幌市.

<https://www.city.sapporo.jp/kyoiku/sidou/jidouseito/bukatsu/documents/r2-3-sapporobukatsudouhoushin.pdf>

札幌市スポーツ推進審議会 (2023). 令和 4 年度札幌市民・子どもの運動・スポーツ活動等調査結果. 札幌市.

<https://www.city.sapporo.jp/sports/shingikai/toushin/documents/09dai2kaisankou3.pdf>

○テーマ:「スポーツを通じた交流」

「スポーツを通じた人と人とのつながり」

【上垣 舞衣(大通)・陸井 翔太(平岸)】

1. テーマ設定の理由

私たちは幼少期から現在までスポーツを続けており、部活動やクラブチームでの活動を通じて、たくさんの人と関わってきました。スポーツは単に身体を動かすだけでなく、人間関係を築くための大切な手段であると感じています。そこで、自分たちの競技経験を活かし、札幌とポートランドでは「スポーツの楽しみ方」や「スポーツを通じた人との関わり方」にどのような違いがあるのかを調べたいと考え、このテーマを設定しました。

2. 調査の視点と方法

今回の探究では、「スポーツを『みる』のが好きなのか、それとも『する』のが好きなのか」という点や、それぞれの都市の気候がスポーツ環境にどう影響しているのかに注目しました。事前調査で札幌の現状を調べたほか、現地ではマウント・テーバー中学校での交流や、街中の公園、公共施設の様子を観察し、現地の人々がどのようにスポーツに関わっているかを調査しました。

3. 調査結果

① 札幌のスポーツ環境と特徴

札幌は冬の寒さが厳しく、雪が多いため、スキーやスケートなどのウィンタースポーツが非常に盛んです。室内施設は整っていますが、冬の間は公園の遊具やグラウンドが雪に埋まって使えなくなってしまうという課題があります。

また、プロチームの人氣も高く、自分たちでプレーするよりも「観戦(みるスポーツ)」を楽しむ人が多い傾向にあると感じました。

② ポートランドのスポーツ環境と特徴

ポートランドは雨が多いものの、バスケットボールや野球など、自分たちで身体を動かす「するスポーツ」を楽しむ人が多いのが特徴です。

現地調査では、スポーツに挑戦できる環境の多さに驚きました。学校のグラウンドやテニスコートが一般の人にも開放されており、街のあちこちに公園があるため、常にスポーツができる場所が身近にありました。また、一つの種目に絞らず、二つ以上のスポーツを掛け持ちして楽しんでいる人が多いことも分かりました。

4. 考察:場所が作るコミュニティの違い

ポートランドでは、公園や開放されたグラウンドが単に運動する場所としてだけでなく、新しい友だちができたり、チームの絆を深めたりする「交流の場所」として機能していました。いつでも誰でもスポーツができる環境があるからこそ、自然と人々が集まり、新しい関わりが生まれています。

対して札幌は、冬の気候の影響もあり、外で気軽にスポーツを楽しむ機会がポートランドより少ないと感じます。環境の差によって、スポーツを通じた人との関わりに対して、無意識に消極的になってしまっている部分があるのではないかと考えました。

5. おわりに

今回の研修を通じて、スポーツには「みんなと一緒に動く大切さ」や「仲良くなる力」があることを再確認しました。

札幌でも、ポートランドのように一年中いつでも気軽にスポーツができる環境づくりに力を入れることで、もっと人と人との交流が盛んになるはずです。今回の発見を活かして、スポーツがもっと身近な街になるよう、私たちも発信していきたいです。

参考文献・出典

Travel Portland「スポーツ観戦 オレゴン州ポートランド」

<https://www.travelportland.com> (2026年4月3日閲覧)

ELKEX「ポートランドに根付くスポーツの地域価値とは」

<https://elkex.com/> (2026年4月3日閲覧)

札幌市公式ホームページ

<https://www.city.sapporo.jp> (2026年4月3日閲覧)

○令和7年度札幌市立高校・ポर्टランド市グラント高校生交流事業関係者一覧

【札幌国際プラザ】

(公財)札幌国際プラザ 副理事長 平木 浩昭

(公財)札幌国際プラザ 多文化交流部 部長 矢萩 英美

(公財)札幌国際プラザ 多文化交流部 推進課 課長 大竹 麻衣子

(公財)札幌国際プラザ 多文化交流部 推進課 課長補佐 青木 麻希子

(公財)札幌国際プラザ 多文化交流部 推進課 課長補佐 山中 麻理子(引率者)

【札幌市立高校】

札幌市立高等学校・特別支援学校長会会長(札幌旭丘高校長) 尾崎 茂樹

札幌市立高等学校 国際教育推進委員会担当校長(札幌清田高校長) 三関 直樹

札幌市立高等学校 国際教育推進委員会担当教頭(札幌新川高校教頭) 牧野 弘幸

札幌市立高等学校 国際教育推進委員会担当教頭(札幌藻岩高校教頭) 細田 亜紀子

札幌市立高等学校 国際教育推進委員会担当教頭(札幌大通高校教頭) 杉山 雅俊

札幌市立高等学校 札幌清田高校教諭 後藤 加奈(引率者・団長)

札幌市立高等学校 札幌平岸高校教諭 金子 京平(引率者)

【派遣生徒】

市立札幌新川高等学校 下山 琉奈(1年)、宮崎 咲良(1年)

市立札幌開成中等教育学校 飯塚 南帆(5年)、山本 祐綺(4年)

市立札幌大通高等学校 上垣 舞衣(3年)、上城 穂乃和(1年)

市立札幌旭丘高等学校 川辺 倫瑠(2年)、大竹 美羽(1年)

市立札幌平岸高等学校 立松 美来(2年)、陸井 翔太(1年)

市立札幌清田高等学校 稲村 怜那(2年)、長谷川 司(2年)

市立札幌藻岩高等学校 佐藤 結(2年)、米谷 心一朗(1年)

市立札幌啓北商業高等学校 日水 陵(2年)、森 香乃羽(2年)

支援・協力者の皆様(抜粋)

◇後援団体

札幌市(後援および生徒旅費補助)、札幌市教育委員会、在札幌米国総領事館

◇協賛団体等

北海道日米協会 様、札幌もいわライオンズクラブ 様

◇札幌市立高校生ポートランド派遣事業に係る募金にご寄付いただいた皆様

ポートランドー札幌姉妹都市協会 様

ほか、2025年度は延べ67名の皆様にご寄付をいただきました。寄付者については、公表を希望される方のみ札幌国際プラザホームページの寄付のページに掲載しています。

◇ポートランド市協力機関および団体

・イマージョン教育親の会

会長 ユキジ・サイトウ様、マヤ・モリ様、サオリ・クラーク様

文化交流コーディネーター 宮崎 壮史様、理事 ビクトリア・ウインクル様

・ポートランド-札幌姉妹都市協会

会長 菊地 真巨様、副会長 ジア・シオンク様、理事 ロビン・ヤング様、

理事 洋子・グールドイ様、理事 本間 千代子様、理事 堀川 直子様、理事 後藤 道様

理事 フィリーシャ・ビショップ様、理事 高橋 奈津子様、理事 宇野 紘一郎様

・ポートランド市グラント高校

校長 ジェイムズ・マクギー様、日本語クラス担当 カヨコ・エイキン先生、キョウコ・ウォルトナー先生

・ポートランド市教育委員会

委員長 エドワード・ワン様

・在ポートランド領事事務所

総領事 等々力 研様、領事 村上 理沙様、調整担当 金子 美津子様

・ポートランド観光協会

シニア・ツーリズム・マネージャー 古川 陽子様

・ポートランド州立大学

国際文化サービスプログラム アドバイザー 堀川 直子様

・リッチモンド小学校

校長 ステイシー・エトウ様

・マウント・テーパー中学校

校長 トーニャ・ロンゴ様、8年生担当 福島 みのり先生

・オレゴン歴史博物館

団体訪問担当 リサ・グリマルディ様

・バーチ・コミュニティサービス

地域・イベントコーディネーター エミリー・ピンクスタッフ様